

あ科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」 研究概要
〔令和4年度事後評価用〕

令和4年6月30日現在

<p>機関番号：32641</p> <p>領域設定期間：平成29年度～令和3年度</p> <p>領域番号：1901</p> <p>研究領域名（和文）トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現</p> <p>研究領域名（英文）Construction of the Face-Body studies in transcultural conditions</p> <p>領域代表者</p> <p>山口 真美（YAMAGUCHI Masami）</p> <p>中央大学・文学部・教授</p> <p>研究者番号：50282257</p> <p>交付決定額（領域設定期間全体）：（直接経費）533,100,000円</p>
--

研究成果の概要：顔や身体表現は、個人が何者であるかを常に発信する媒体である。文化間の壁が取り壊されると同時に、新たな文化が作られる「トランスカルチャー状況」において、顔や身体に対して人間が無意識に持っている感覚を、心理学・文化人類学・哲学の綿密な連携により、多角的に解明した。さまざまなイベントを通して社会との議論の場を持つとともに、顔や身体に関わる差別の問題についての研究倫理を発信し、人文・社会科学分野の中に顔身体学を位置づけた。

研究分野：人文・社会系

キーワード：顔身体学 心理学 文化人類学 脳科学 哲学

1. 研究開始当初の背景

顔と身体表現は、常に個人の由来を露出・顕著に表し、その個人が何者であるかを解読可能とする媒体である。インターネットの普及や、移住者・外国人労働者の受け入れが拡大する中で、現代社会に生きる人類は、これまでにない大量の顔と身体表現にさらされることとなった。その中で、自分と肌の色や性別が違う人を違う目で見てしまうといった「壁」の存在が再認識される。我々日本人にとっても、「刺青」に対する忌避感やヴェールをかぶった女性に対する違和感は身近にあり、異質を捉え直す時期にあると考えた。そこで、文化の壁を取り壊す力と文化を作る力が同時に働いている状況を「トランスカルチャー状況」と定義し、個人が自らの顔や身体と向き合いながら、どのようにトランスカルチャー状況に適応するかに注目した。

2. 研究の目的

現代社会が直面しつつあるトランスカルチャー状況下への解決策のひとつとして、顔と身体表現に対して無意識的・潜在的に持っている感覚を明らかにし、意識化することを目指す。壁を壊しつつ、壁を作り上げることを避けられない人類の特性について、個のあり方に焦点を当ててとらえていく。誰もが他者の視線にさらされ続け必ず持っている「顔」と「身体」という対象を用いて、人文・社会科学分野を再構築する。

3. 研究の方法

心理学、文化人類学などの実証的なアプローチに加え、顔と装いに関する哲学的な視点も取り入れた研究を進めた。項目A「顔と身体表現の異文化性検討」では、フィールドワークの手法を通して、衣類・装飾・舞踊といった身体表現や、顔や身体を用いた感情表現の文化依存性・多文化性について検討した。項目B「顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明」では、心理学・脳科学的手法を用いることで、顔や身体認識様式の文化差を明らかにするとともに、その形成過程やメカニズムを探った。項目C「顔と身体表現の比較現象学」では、トランスカルチャー概念の再定義や洗練化を行うとともに、顔をめぐる他者理解／異質性の理解の問題を社会全体に啓蒙する活動を行った。これらに加えて、美学、化粧学、考古学、社会学などの観点から、時代や社会を超えて存在する顔や身体表現の理解が深められた。

4. 研究の成果

(1) 計画 A01-P01「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」(床呂 郁哉) [1-2, 39-42]

人類学的フィールドワークを含むフィールドサイエンスの研究手法を駆使し、顔と身体表現について、イスラーム圏を含む東南アジアなど各地における異なる文化・社会的文脈に応じた比較研究を遂行した。令和元年から令和3年度は、衣服、装飾、仮面、ヴェール、スカーフ、マスク着用など顔と身体表現に関わる項目に関して、コロナ・パンデミック状況に即したオンライン調査を含む調査研究を実施した。この過程で日本(ないし東アジア)発のいわゆる「オタク文化」「カワイイ文化」が、マレーシアやフィリピン南部などムスリム社会を含む東南アジアの若者層にいかにか越境し、受容されているかを、「ヒジャーブコスプレ」などを含む新たな身体表現に注目して人類学的な調査を実施した。また、バリを対象に、現地のパフォーマンスアーツにおける障害者をめぐる身体表現等をめぐっても研究を実施することができた。

(2) 計画 A01-P02「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」(高橋 康介) [3-7]

表情認知の多様性に関するフィールド実験(2017~2019年までタンザニア、カメルーン、ケニア、フィンランド、タイ、中国等計16回)を進める中で、西洋化された地域において目と口の三点からなる単純な図式が頻出するのに対して、カメルーンやタンザニアでは鼻や眉などのパーツが顕著に描かれた。このことは従来の西洋中心史観に基づく心理学が信じてきた顔認知の枠組みを根底から覆すものであり、トランスカルチャー時代のface-to-faceコミュニケーションの中で極めて重要な知見である。期間後半はコロナ禍によりフィールドワークの道が閉ざされたが、人類学と心理学の融合についてチーム内で議論を重ね、新たな研究アプローチのあり方を模索した。その結果、定量的データと人類学的解釈の往復というシンプルな循環モデルは現実のフィールド実験では通用しないこと、一回起性のフィールドワークと再現性の実験の矛盾を止揚する形でフィールド実験を位置づける必要があることが明らかとなった。

(3) 計画 B01-P01「顔と身体表現の文化差の形成過程」(山口 真美) [8-12, 43-44]

顔身体文化差の形成過程の脳内機構の発達としては、正面顔と横顔の認知における縦断データに基づく発達段階と、顔処理と身体処理それぞれの脳内機構の発達について明らかにした。非定型な発達を示すADHD児を対象に、ADHD児の持つ表情処理の怒り顔認識の困難さが、投薬によって変化することを脳活動から示した。また顔への注意に関する研究では、生後7-8ヶ月児が、0.1秒間隔で連続提示される視覚情報の中から顔を検出し、さらに人物同定までできることを明らかにし、生後半年以上の乳児では、視野の下にある顔よりも上にある顔に最初に注意が向く上に記憶もよいことを明らかにした。コミュニケーションとして重要な同調を調べた研究では、5-6ヶ月の乳児の瞳孔径への顔の重要性を示すことができた。海外との共同研究を精力的に行い、これらの知見は多くのメディアで発信された。

(4) 計画 B01-P02「顔と身体表現における潜在的・顕在的過程」(渡邊 克巳) [13-18]

顔身体における認知行動の潜在的・顕在的過程を取り扱う本研究班では、実験心理学的・神経科学的手法を用いた研究を幅広く進めてきた。中間報告までには、国際共同顔・表情データベースの構築、主観印象を操作できる顔構造統計モデルの構築、社会適応に関わる顔身体認知の社会・文化による影響などの研究を進めた。中間報告以降は、それらの研究成果やデータベース、顔構造統計モデルを活用した顔の印象研究を展開するとともに、身体運動・身体表現、視線と頭の向きの相互作用、顔認知と内受容感覚の関係の解明、身体動作の主体感などの研究を行うことで、より身体に意識をむけた展開を行った。例えば、公募班の磯村との共同研究では、直視されている状況では自分自身の心拍をより正確にカウントできる(内受容感覚が高まっている)ことを明らかにしている。

(5) 計画 B01-P03「顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較」(田中 章浩) [19-23, 45]

主として感覚間統合の視点から、顔と身体文化差の形成過程とその基盤について検討した。オランダ人では一貫して相手の顔を優先させて感情を読み取る「顔優位」であるのに対し、日本人では顔優位から児童期を通して徐々に声優位にシフトするとの発見が最大の成果である。また、相手に「境界」を見出す要素は見た目ではなく、相手の話す言語によって作られる側面があることを明らかにした。加えて、トランスカルチャーの一例である成人移民を対象に脳イメージング実験を実施し、移住による異文化再適応によって感情知覚における顔と声の影響の強さが変化することを示した。期間後半には身体に関する項目を充実させ、ポジティブ感情はタッチから伝わりやすいこと、VR環境では対象のサイズについて約5%の過小評価が生じることなど、それぞれのチャンネルがもつ特性とその文化差を明らかにした。

(6) 計画 C01-P01「顔と身体表現の比較現象学」(河野 哲也) [24-27, 46-48]

顔身体学の理論面での基礎の構築ならびに研究情報の発信と学術交流の場を展開してきた。「カルチャー」という現象が、境界確定と越境、分離と融合、アイデンティティの安定化と再構築という矛盾した二方向の力のせめぎあいからできていることを明らかにし、「トランスカルチャー状況下」とは、単なる文化比較にとどまるのではなく、異文化が出会うところでそれぞれの文化そのものが常に更新される状況であると定義した。以上の定義に基づき、『顔身体学ハンドブック』の出版を行うことで実証的な各研究の顔身体学における配置を明確化し、「比較現象学」を展開するための土台として査読付き英文雑誌 *Philosophy & Cultural Embodiment* を2号まで発刊した。加えて、哲学対話などのアウトリーチ活動を分析するツールとして顔身体学アプリを開発した。このアプリは映像の操作、編集、書き込みが容易で、コメントなど多彩なメタ情報を書

き加えることができ、領域全体のコロナ状況下での研究に大いに寄与した。さらに、外見に基づく差別（ルッキズム）に、性差や人種に基づく差別が密接に関わっていることを明らかにし、差別の捉え方やそれへの取り組み方に関して、現象学的観点から従来の枠組を刷新する試みを行ってきた。こうした知見を活かして、顔身体学をめぐる研究倫理ガイドライン作成にも取り組み、哲学・心理学・人類学など多分野にわたる研究者たちが向き合うべき課題を取りまとめ、2021年度に研究倫理に関する教育用動画を作成した。

(7) A01 文化人類学公募 [28-30, 49]

山本班（A01-K105、A01-K204）は、国際シンポジウム「イレズミ・タトゥーと多文化共生—「温泉タトゥー問題」への取り組みを知る」を主催した（H31.3.30）。コロナ禍でフィールド調査が難しかった時期には、19世紀後半の彫師「彫千代」の刺青下絵や資料を掘り起こした。さらに、2021年に立ち上げた「タトゥー文化研究会」の研究成果を、日本ではじめてのイレズミ研究論集『身体を彫る、世界を印す—イレズミ・タトゥーの人類学』として刊行した。

田班（A01-K202）では、牧畜民マサイ社会における顔・身体の多様な認識と表現を理解するため、フィールド調査から得られた多様な現場での若者の高跳び実践を、民族誌とバイオメカニクスの研究方法を融合してその特徴を検討した。マサイの高跳びに競技性が薄く、かわりにリズムとそれに合わせた個々人の身振りが重視されていることがわかった。運動疫学の研究者との連携によって子どもの身体活動と仕事・遊び参加の関連性を定量・定性的な分析から明らかにした。

(8) B01 心理学公募 [31-37]

人間の脳の視覚情報処理は、これまで経験した視覚入力の画像統計量を反映した形で、自己組織的に獲得されると考えられ、地域間での視覚経験の違いによる脳内情報表現の違いは、顔や身体表現の地域差を生みだし、これらの地域差が文化差の根拠の一つとなっている可能性がある。林班（B01-K115、B01-K215）では、教師信号を用いない機械学習や深層ニューラルネットワークを用いてこれを検討した。

河原班（B01-K201）では、衛生マスクが外見的魅力に及ぼすポジティブ・ネガティブな遮蔽効果をテーマとした。東アジア地域では日常で衛生マスクを装着する文化が以前からあり、マスク装着は外見的魅力を変調していた。COVID-19流行によって「マスク=不健康」という意味的関連が断ち切れ、遮蔽によって魅力に関わる特徴が減るために、もともとの高魅力顔は魅力が低下し、低魅力顔は上昇するという予測を実証できた。Web実験を活用した国際比較も実施できた。

工藤班（B01-K202）では、力学系数理モデル、オンライン実験、および映像/身体運動解析を用いたヒト認知行動の定量化により、対人間コミュニケーションを支える身体協調の役割を解明した。二者の関係性評価における声と身振りの役割・隣接して走る陸上競技走者の運動協調・書画技術の伝承の検討により、対人間コミュニケーション研究における「環境に埋め込まれた身体と身体」という視点の重要性が示唆された。

(9) C01 哲学公募 [38, 50-51]

田中咲子班（C01-K102）では、古代ギリシア・ローマ美術における「(両)手を上げる」身振りに着目し、その意味の変遷過程を明らかにするとともに、変化の要因を美術史・社会史的に説明することを目指した。身振りの図像表現を読み解く際には、生得的な身振りと社会的(後天的)なそれとを区別する必要がある、領域会議ではチンパンジーの専門家から種を超えた共通性について議論がなされるなど、身体をテーマとした人文科学と比較認知科学の融合が進んだ。

田中彰吾班（C01-K203）では、身体性認知に基づく自己の見方を出発点として、従来の文化心理学における「日本の自己」をめぐる言説を「身体と社会の相互作用」の観点から批判的に検証した。日本固有の精神疾患とされてきた「対人恐怖症」について、20世紀前半の都市化の過程で「精神病理」として認知され始め、欧米との文化交流が少なかった1970年代までは日本特有の「文化結合症候群」とされたが、現在のトランスカルチャー状況下では世界共通の「社交不安障害」の亜型とされるに至っている、という歴史的経緯を明らかにした。

5. 主な発表論文等（受賞等を含む） 研究代表者; 研究分担者; *Corresponding Author

主な発表論文

- [1] Goto, M. (2021). Representing the Emirati Nation through Burqu': Local Identity or Imagined Community? In Kondo, Y. (Eds.) *The Arabian Peninsula: History, Culture, and Society* (pp. 67-91). (査読無)
- [2] Nishii, R. (2019). The "Face" and the other: Muslim Women Behind the Veil. In Kawai, K. (Ed.) *Others: The Evolution of Human Sociality* (pp. 283-301). Trans Pacific Press. (査読有)
- [3] *Ujiie, Y., & Takahashi, K. (2022). Associations between self-reported social touch avoidance, hypersensitivity, and autistic traits: Results from questionnaire research among typically developing adults. *Personality and Individual Differences*, 184, 111186. (査読有)
- [4] *Ujiie, Y., & Takahashi, K. (2021). Own-race faces promote integrated audiovisual speech information. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 75(5), 924-935. (査読有)
- [5] 高橋康介・島田将喜・田暁潔・錢琨・大石高典 (2020). 顔とemojiのフィールドワーク～異分野融合のフィールド実験で「顔を見る／読む／描く」に挑むフロンティア フィールドプラス, 25, 23-25. (査読無)
- [6] *Qian, K., & Yahara, T. (2020). Mentality and behavior in COVID-19 emergency status in Japan:

- Influence of personality, morality and ideology. *PLoS ONE*, 15(7): e0235883. (査読有)
- [7] Takahashi, K., Oishi, T., Shimada, M. (2017). Is ☺ Smiling? Cross-cultural Study on Recognition of Emoticon's Emotion. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 48 (10), 1578-1586. (査読有)
- [8] *Tsuji, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2022). Face-specific pupil contagion in infants. *Frontiers in Psychology*, 12, 789618. (査読有)
- [9] *Kobayashi, M., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & O'Toole, A. J. (2021). Cortical processing of dynamic bodies in the superior occipito-temporal regions of the infants' brain: Difference from dynamic faces and inversion effect. *NeuroImage*, 244, 118598. (査読有)
- [10] *Ujiie, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2021). The other-race effect on the McGurk effect in infancy. *Attention, Perception, & Psychophysics*, 83, 2924-2936. (査読有)
- [11] *Tsurumi, S., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Kawahara, J. (2019). Rapid identification of the face in infants. *Journal of Experimental Child Psychology*. 186, 45-58. (査読有)
- [12] *Ichikawa, H., Nakato, E., Igarashi, Y., Okada, M., Kanazawa, S., Yamaguchi M. K., & Kakigi, R. (2019). A longitudinal study of infant view-invariant face processing during the first 3-8 months of life. *Neuroimage* 186, 817-824. (査読有)
- [13] *Dalmaso, M., Vicovaro, M., & Watanabe, K. (2022). Cross-cultural evidence of a space-ethnicity association in face categorisation. *Current Psychology*, 10.1007/s12144-022-02920-7 (査読有)
- [14] de Lissa, P., Sokhn, N., Lasrado, S., Tanaka, K., Watanabe, K., & *Caldara, R. (2021). Rapid saccadic categorization of other-race faces. *Journal of Vision*, 21(12), 1-17. (査読有)
- [15] *Isomura, T. & Watanabe, K. (2020). Direct gaze enhances interoceptive accuracy. *Cognition*, 195, 104113. (査読有)
- [16] *Matsuyoshi, D., & Watanabe, K. (2020). People have modest, not good, insight into their face recognition ability: a comparison between self-report questionnaires. *Psychological Research*, 84, 1. (査読有)
- [17] Palmer, C. J., Otsuka, Y., & *Clifford, C. W. G. (2020). A sparkle in the eye: Illumination cues and lightness constancy in the perception of eye contact. *Cognition*, 205, 104419. (査読有)
- [18] *Nakamura, K., & Watanabe, K. (2019) Data-driven mathematical model of East-Asian facial attractiveness: The relative contributions of shape and reflectance to attractiveness judgements. *Royal Society Open Science*, 6, 182189. (査読有)
- [19] Oya, R. & *Tanaka, A. (2022). Cross-cultural similarity and cultural specificity in the emotion perception from touch. *Emotion*, Advance online publication. (査読有)
- [20] Ando L. & *Itaguchi Y. (2022). The heavier the arm, the higher the action: the effects of forearm-weight changes on reach-to-grasp movements. *Experimental Brain Research*, 240, 1515-1528. (査読有)
- [21] Kawahara, M., Sauter, D. A., & *Tanaka, A. (2021). Culture shapes emotion perception from faces and voices: changes over development. *Cognition and Emotion*, 35(6), 1175-1186.(査読有)
- [22] Yamamoto, H. W., Kawahara, M., & *Tanaka, A. (2020). Audiovisual emotion perception develops differently from audiovisual phoneme perception during childhood. *PLoS ONE*, 15(6), e0234553. (査読有)
- [23] Kawahara, M., Yamamoto, H. W., & *Tanaka, A. (2019). Language or appearance? The trigger of the in-group effect in multisensory emotion perception. *Acoustical Science and Technology*, 40(5), 360-363. (査読有)
- [24] 小手川正二郎 (2021). 経験の記述は、なぜ批判的なのか？—フェミニスト現象学への諸批判に対する応答 現象学年報, 37, 19-29. (査読無)
- [25] 池田喬・小手川正二郎 (2021). 「人種化する知覚」の何が問題なのか？—知覚予期モデルによる現象学的分析 思想, 1169, 68-87. (査読無)
- [26] 小手川正二郎 (2019). 「男性的」自己欺瞞とフェミニズム的「男らしさ」—男性性の現象学 立命館大学人文科学研究所紀要, 120, 169-197. (査読無)
- [27] 河野哲也 (2019). 顔の比較現象学 日本顔学会誌, 19, 25-31. (査読有)
- [28] 山本芳美 (2021). 「日本みやげ」としてのイレズミ：十九世紀から二十世紀初頭における外国人観光と彫師 日本研究, 63, 43-83. (査読有)
- [29] Tian, X. (2021). Un apprentissage « par les pieds ». L'éducation des enfants de pasteurs maasai (English: "Knowing by Feet" in the Growing-up of Pastoralist Maasai Children in the Savanna). *Techniques & Culture*, 76, 70-83. (査読有)
- [30] 中村耕作 (2021). 注口土器・香炉形土器の異形化・顔身体化と社会背景 季刊考古学, 155, 84-88. (査読無)
- [31] Dudarev, V., Kamatani, M., Miyazaki, Y., Enns, J. T., & Kawahara, J. I. (in press). The attractiveness of masked faces is influenced by race and mask attitudes. *Frontiers in Psychology-Cognitive Science* (査読有)
- [32] Kamatani, M., Ito, M., Miyazaki, Y., & Kawahara, J. I. (2021). Effects of masks worn to protect against COVID-19 on the perception of facial attractiveness. *i-Perception*, 12(3), 1-14. (査読有)
- [33] *Ueda, Y. (2022). Understanding mood of the crowd with facial expressions: Majority judgment for

evaluation of statistical summary perception. *Attention, Perception, & Psychophysics*, 84(3), 843-860. (査読有)

- [34] Kurihara, K., Takahashi, T., & *Osu, R. (2022). The relationship between stability of interpersonal coordination and inter-brain EEG synchronization during anti-phase tapping. *Scientific Reports*, 12(1), 6164. (査読有)
- [35] Matsuda, S., Omori, T., McCleery, J. P., & Yamamoto, J. (2019). Comparing Reinforcement Values of Facial Expressions: An Eye-Tracking Study. *Psychological Record*, 69(3), 393-400. (査読有)
- [36] Hashiya, K., Meng, X., Uto, Y., & Tajiri, K. (2019). Overt congruent facial reaction to dynamic emotional expressions in 9-10-month-old infants. *Infant Behavior and Development*, 54, 48-56. (査読有)
- [37] Minami, T., Nakajima, K., & Nakauchi, S. (2018). Effects of Face and Background Color on Facial Expression Perception. *Frontiers in Psychology*, 9: 1012. (査読有)
- [38] Tanaka, S. (2021). Beyond the "body-in-the-brain": A phenomenological view of phantom limbs, *Philosophy & Cultural Embodiment*, 1(1), 39-51. (査読有)

著書

- [39] 床呂郁哉 (2021). わざの人類学 京都大学学術出版会
- [40] Tokoro, I. & Tomizawa H. (Eds.) (2021). *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia* (Vol.3). ILCAA, TUFS.
- [41] 床呂郁哉・河合香吏 (2019). ものの人類学 2 京都大学学術出版会
- [42] Tokoro, I. & Kawai K. (2018). *An Anthropology of Things*. Kyoto University Press & Trans Pacific Press.
- [43] 山口真美・河野哲也・床呂郁哉 (2022.7 予定). コロナ時代の身体コミュニケーション 勁草書房
- [44] 山口真美 (2020). こころと身体の心理学 岩波ジュニア新書
- [45] 田中章浩 (2022.9 予定). 顔を聞き, 声を見る—私たちの多感覚コミュニケーション 共立出版
- [46] 河野哲也 (2022). 間合い: 生態学的現象学の探究 (知の生態学の冒険 J.J. ギブソンの継承 2) 東京大学出版会
- [47] 河野哲也・山口真美・金沢創・渡邊克己・田中章浩・床呂郁哉・高橋康介 (2021). 顔身体学ハンドブック 東京大学出版会
- [48] 小手川正二郎 (2020). 現実を解きほぐすための哲学 トランスビュー
- [49] 山本芳美・桑原牧子・津村文彦 (2022). 身体を彫る、世界を印す—イレズミ・タトゥーの人類学 春風社
- [50] 田中彰吾 (2022). 自己と他者—身体性のパースペクティブから (知の生態学の冒険 J. J. ギブソンの継承 3) 東京大学出版会
- [51] Ataria, Y., Tanaka, S., & Gallagher, S. (2021) *Body Schema and Body Image: New Directions*. Oxford University Press.

受賞・イベント・アウトリーチ

- [52] 令和 2 年度科学技術分野 文部科学大臣表彰「科学技術賞 (研究部門)」(2020.04、渡邊克己)
- [53] 令和 3 年度科学技術分野 文部科学大臣表彰「若手科学者賞」(2021.04、山田祐樹)
- [54] 日本心理学会賞 国際賞奨励賞 計 5 件 (2018.09~2021.09、山田祐樹・伊村知子・高橋康介・楊嘉楽・大塚由美子)
- [55] 公開シンポジウム『顔認証倫理—デジタルリスクとその克服』(2022.3.12)
- [56] 公開シンポジウム『シンクロする身体』(2021.11.07)
- [57] 公開ワークショップ『表現する身体と見つめる身体: 森田かずよ氏 (義足のダンサー) × 井桁裕子氏 (人形作家)』(2021.09.26)
- [58] 公開シンポジウム『身体再考』(2021.2.21)
- [59] ジャカルタ国際シンポジウム『Performing the Self and Playing with the Otherness: Clothing and Costuming under Transcultural conditions』(2020.10.26)
- [60] 国際シンポジウム『ミックスレイスの顔身体表象—学際的研究を目指して』(2020.8.23)
- [61] 国際シンポジウム『イレズミ・タトゥーと多文化共生—「温泉タトゥー問題」への取り組みを知る』(2019.3.30)
- [62] 国際シンポジウム『トランスカルチャーとは何か? 心理学と哲学の協働』(2019.3.2-3)
- [63] AA 研公開シンポジウム『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築』計 5 回 (2017.12~2021.12)
- [64] 顔身体カフェ「顔を描く・顔を描かれる・顔を知る」「あなたは自分の顔が好きですか?」他、計 10 回

主要なホームページ等 顔身体学領域ウェブサイト (<http://kao-shintai.jp/>)